

身振りによる日本語アクセントの 効果的な指導法の研究

日语语音教学中关于肢体语言的有效指导方法研究

崔春福 著



济南大学出版社

身振りによる日本語アクセントの 効果的な指導法の研究

日语语音教学中关于肢体语言的有效指导方法研究

崔春福 著

西南交通大学出版社
· 成 都 ·

图书在版编目 (C I P) 数据

日语语音教学中关于肢体语言的有效指导方法研究 /
崔春福著. —成都: 西南交通大学出版社, 2015.7
ISBN 978-7-5643-3983-8

I. ①日… II. ①崔… III. ①身势语—应用—日语—
教学研究 IV. ①H369.3

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2015) 第 139134 号

日语语音教学中关于肢体语言的有效指导方法研究

崔春福 著

责任编辑	祁素玲
特邀编辑	童 荷
封面设计	何东琳设计工作室
出版发行	西南交通大学出版社 (四川省成都市金牛区交大路 146 号)
发行部电话	028-87600564 028-87600533
邮政编码	610031
网 址	http://www.xnjdcbs.com
印 刷	四川煤田地质制图印刷厂
成品尺寸	148 mm × 210 mm
印 张	6
字 数	201 千字
版 次	2015 年 7 月第 1 版
印 次	2015 年 7 月第 1 次
书 号	ISBN 978-7-5643-3983-8
定 价	32.00 元

图书如有印装质量问题 本社负责退换
版权所有 盗版必究 举报电话: 028-87600562

まえがき

従来の日本語アクセントの指導は、主にカセットテープなどの音声教材を利用し、機械的に聴く訓練であったため、学習者が学習意欲を持ちにくいという欠点があった。これに対して、身振りによる日本語アクセント指導法は、発音の習得を言語全体構造の枠組みで捉える視点を持つ点でユニークである。しかし、日本語教育における身振りによる音声指導法には、実践方法、指導法が確立されていないという問題がある。音声教育の研究論文では教育方法に関するさまざまな提言がなされているが、その教育内容の有効性が教室での効果測定を繰り返すことで検証されたものは、ほとんどない。本書は、音声学習・音声教育と身体運動は密接なつながりがあるという観点に立って、これに基づいて、中国語母語話者を対象に、身振りによる日本語アクセントの効果的な指導方法を研究・開発することとした。その結果、身振りによる日本語アクセント指導法の研究として、日本語音声教育の分野と言語的側面から身振りによる日本語アクセント指導法に対して、理論上の提案を行うだけではなく、実際にその指導法を実施し、一定の教育効果があることを示した。

これまでの日本語アクセント指導法に関する著作に比べ、本書の特徴は、以下の3点に集約できる。

(1) 本書は、音声教育における、日本語アクセント教育の重要性について、言語面および海外と日本国内におけるアクセン

ト教育という視点から、その現状と問題点について考察した。音声教育における、日本語アクセント教育の重要性についての考察においても、単なるアクセントの重要性だけを強調するだけではなく、アクセント産出のための聞き取りのためのストラテジーおよびアクセントの導入時期と使用頻度などについて、具体的な論拠の提示とともに考察した。これによって、本書は、音声教育における日本語アクセント教育に対して極めて有効な知見をもたらすことができたと考えられる。

(2) 中国語母語話者を対象として、身振りによる日本語アクセント指導法について、理論上の提案だけではなく、実際にその指導法を実施し、科学的な知見に基づいた統計的な分析の結果、身振りによるアクセント指導法は効果があるということを理論と実践で検証した。言語理論および教育理念に基づく先行研究について、幅広い分野からの考察を踏まえた上で、現在の日本語音声教育指導法の理念による「言聴聴覚論」を理論的基盤とする、身振りによる日本語アクセント指導法の効果を検証したのは、本書の大きな成果と言える。

(3) 第二言語習得の研究分野の中では、言語自体に着目した研究が多数ある。しかし、発話だけで発話の意図を分析するには限りがある。そこで、本書では、身振りを伴う言語課題の観察の際に見られる学習者の口唇部支配運動野の興奮性について、運動生理学的な観点から結果を考察した。本書では、身体の動きを利用した外国語の発音指導法の有効性を検討するための生理学的資料を得るために、言語発生時における hand gesture の条件の違いが学習者の口唇部支配運動野の興奮性に与える影響について TMS を用いて検討した。その結果、「身振りなし条件」の従来の音声教示による日本語アクセントの指導法に比べて、「両腕の身振り条件」による指導法において、観察者の OR 支配運動野が有意に増大したことが示された。つまり、「両腕身振り

条件」では言語発声時の **hand gesture** で日本語アクセントの高低感覚を視覚的に提示するため、観察者自身の発声イメージの構築を容易にし、結果として **OR** 支配運動野の興奮性が増大したものと考えられる。これに対して、音声教示のみの「身振りなし条件」による日本語アクセントの指導法では、観察者は教示者の口唇部の動きではなく全身像を観察していることから、視覚効果が弱く、**OR** 支配運動野の興奮性を増大させるには不十分であったものと思われる。従って、これらの結果は、からの動きを利用した発音指導法の有用性を生理学的観点からも支持するものと考えられる。

本書は、著者が広島大学に提出した博士論文の研究成果である。本研究の実施および執筆にあたり、研究内容や研究活動のさまざまな場において叱咤激励をいただいた指導教員の吉田光演教授に心から感謝の気持ちを表したいと思う。

なお、本書が出版されるにあたり、西南交通出版社の編集長秦薇氏より、いろいろなご助言をいただいた。また、同社の祁素玲氏、童荷氏には編集などで大変お世話になった。みなさんに対して、ここに深く感謝のお礼を申し上げたい。

崔春福

2015 年 4 月

目次

第1章	本研究の目的と構成	1
第2章	音声教育における日本語アクセント 教育の重要性	5
2.0	日本語の音声面におけるアクセントの役割	5
2.1	日本語アクセント教育の頻度（いつ教えるか） と時間配分などについて	7
2.2	海外および日本国内における、日本語アクセント 教育の現状と問題点	12
第3章	日本語と中国語の言語構造 と言語機能の相異点	18
3.0	はじめに	18
3.1	日本語のアクセント	19
3.2	中国語の発音（声調）	28
第4章	音声教育における日本語アクセント 指導法に関する先行研究	36
4.0	はじめに	36
4.1	言語教育の現場における音声の捉え方	37
4.2	「言聴聴覚論」の原理および「言聴聴覚論」 に基づく外国語の発音指導法	46
4.3	従来の日本語アクセント指導法	57

4.4 身振りによる、日本語アクセント指導法に関する 先行研究	61
--	----

第5章 VT法 (Verbo-Tonal Method)

に対する学習者の評価	69
------------------	----

5.0 問題と目的	69
5.1 日本語教育におけるアクセントの指導法	71
5.2 中国語母語話者を対象に実施したアンケート調査	72
5.3 まとめと今後の課題	77

第6章 他者の身振りを伴う発話観察中の

口唇部支配運動野の興奮性変化	78
----------------------	----

6.0 はじめに	78
6.1 実験方法	80
6.2 結果	84
6.3 考察	88

第7章 日本語アクセント指導法に

に対する学習者の評価	92
------------------	----

7.0 はじめに	92
7.1 日本語アクセント指導法	93
7.2 実験の手続きについて	96
7.3 アンケート調査の結果と考察	99
7.4 まとめと今後の課題	108

第8章 身振りによる日本語アクセント

指導法の効果について	111
------------------	-----

8.0 はじめに	111
8.1 実験の方法	112

8.2 実験単語に関して	113
8.3 実験手順	114
8.4 指導の具体的な流れ	115
8.5 実験的処置の前後	116
8.6 音声録音	117
8.7 音響解析	118
8.8 発音の採点方法	120
8.9 母集団（実験群&統制群）における、 関連の考え方と基本周波数の抽出	125
8.10 実験結果	135
8.11 結果とまとめ（考察と今後の課題）	143
第9章 結 論	147
9.1 本研究の成果	147
9.2 具体的な指導法の試案	150
9.3 本研究の革新点	152
9.4 今後の課題	154
付 録	156
付録1 日本語学習についての調査表・学力テスト	156
付録2 日本語能力試験 回答用紙	157
付録3 日本語能力試験	158
参考文献	167
あとがき	180

第1章 本研究の目的と構成

本研究は、中国語母語話者を対象とした、身振りによる日本語アクセントの効果的な指導方法を研究・開発することを目的とする。

従来の日本語アクセントの指導は、主にカセットテープなどの音声教材を利用し、機械的に聴く訓練であったため、学習者が学習意欲を持ちにくいという欠点があった。これに対して、身振りによる日本語アクセント指導法は、発音の習得を言語全体構造の枠組みで捉える視点を持つ点でユニークである。しかし、日本語教育における身振りによる音声指導法には、実践方法、指導法が確立されていないという問題がある。音声教育の研究論文では教育方法に関するさまざまな提言がなされているが、その教育内容の有効性が教室での効果測定を繰り返すことで検証されたものは、ほとんどない(松崎 2001p.253)。筆者は、音声学習・音声教育と身体運動は密接なつながりがあるという観点に立って、これに基づいて、中国語母語話者を対象に、身振りによる日本語アクセントの効果的な指導方法を研究・開発することとする。

以上の前提に基づき、本研究の全体構成は、以下の通りである。

第1章では、本研究の目的と構成について述べる。

第2章では、音声教育における日本語アクセント教育の重要性について述べる。まず、音声面における日本語アクセントの

役割について、アクセントの機能と特徴の面から考察する。その次に、日本語教育の中でのアクセント教育の位置づけおよびアクセント学習の必要性和教育の重要性について述べる。さらに、海外および日本国内における、アクセント教育の現状と問題点について検討する。結論として、日本語教育の中でのアクセント教育の重要性について、音声面だけでなく、聞き取りのためのストラテジーおよび日本語音声教育の現状と問題点についての分析も視野に入れて考察することで、日本語アクセント教育に対する有用な知見が得られると考えられる。

第3章では、音声教育における、対照分析と誤用分析という観点から、日本語と中国語という2つの言語の言語構造と言語機能の相異点について分析する。本研究は、中国語母語話者を対象として研究を進めているので、中国語を母語とすることによって、日本語のアクセント習得にどのような影響が出てくるのかについて検討する必要がある。そこで、具体的には、まず、日本語と中国語の両言語の相異点について、単一語レベルと複合語レベルでの両言語の相異点について分析する。その上で、中国語母語話者による日本語アクセントの発音上の問題点について分析する。

第4章では、音声教育における日本語アクセント指導法に関する先行研究について検討する。まず、外国語教育理論の史的発展と日本語教育という視点から、言語理論や教育理念に基づく言語教育の現場における音声の捉え方について述べる。次に、日本語教育における音声教育の観点から、日本語音声教育方法の基本的な理論的基盤としての「言聴聴覚論」の原理および「言聴聴覚論」に基づく外国語の発音指導法について検討する。その次に、音声教育の方法としての、日本語アクセント指導法の先行研究について紹介する。最後に、身振りによる日本語アクセ

セント指導法を紹介し、身振りを用いた先行研究を考察し、問題設定と仮説を立てる。

第5章では、中国語母語話者を対象に、「VT法」に対する学習者の評価についてアンケート調査を実施し、アンケート調査の分析結果に基づき、より効果的な指導法を検討する。なぜなら、日本語アクセントを効果的に教える前提条件として、まず、日本語を学ぶ学習者がさまざまな指導法についてどう考えているかを調べる必要があり、その上でこそ学習者の適性に合う、心理的・物理的に受け入れやすいアクセント練習のための効果的な指導ができるからである。

第6章では、第二言語習得の研究分野の中には、言語自体に着目した研究が多数ある。しかし、発話だけに発話の意図が現れるとは限らない。そこで、第6章では、身振りを伴う言語課題の観察の際の学習者の口唇部支配運動野の興奮性について、運動生理学的な観点から結果を考察する。具体的には、身体の動きを利用した外国語の発音指導法の有効性を検討するための生理学的資料を得るために、言語発生時における手の動きの条件の違いが学習者の口唇部支配運動野の興奮性に与える影響について経頭蓋磁気刺激 (transcranial magnetic stimulation, TMS) を用いて検討する。その結果に基づき、からだの動きを利用した発音指導法の有用性が生理学的観点からも支持されるものと考えられる。

第7章では、中国語母語話者を対象として、日本語アクセント指導法に対する学習者の評価について述べる。第7章には、第5章の追跡アンケート調査もある。第5章では、「VT法」と従来のアクセント指導法という、2つのアクセント指導法に対する学習者の評価を調べるためにアンケート調査を実施したが、第7章では、「VT法」とその他のアクセント指導法も含めてア

クセント調査を実施する。したがって、日本語アクセント指導法に対して、より具体的な調査を実施することができ、これによって、効果的な日本語アクセント指導法の検討のために利用できると思われる。

第8章では、中国語母語話者を対象に実施した、身振りによる日本語アクセント指導法の効果について述べる。具体的には、日本語教育実験心理学デザイン（乱塊法）に基づき、実験群と統制群の2つのグループに分け、学習者に身振りによるアクセント指導と従来法でアクセント指導を行い、指導前後における正解率および指導の定着度による成績変化を分析することによりアクセント指導法の効果を比較検討する。

第9章の結論では、本研究の成果をまとめ、今後の課題について述べる。具体的には、本研究で得られた知見について述べる。これを踏まえ、更に先行研究を考察し、研究を深め、より効果的な音声指導法を提案する。

第2章 音声教育における日本語 アクセント教育の重要性

2.0 日本語の音声面におけるアクセントの役割

日本語の音声面において、アクセントは重要な役割を果たしている。日本語の音節の長さや一つ一つの音の発音もアクセントと深い関係があり、外国人に日本語を教える場合にアクセントの問題を無視するわけにはいかない。

従って、教師は規範となるアクセントで日本語を話すことができなければならない。また、規範といえるアクセントを身につけている教師の場合でも、自分自身が使っているアクセントについて、意識的にその形をとらえ、学習者に提示できなければならない。しかも、それは「橋（ハシ）」と「箸（ハシ）」は違うといった個々の現象的な面を指導するだけでなく、体系の中にある法則性などを効率的に学習者に説明でき、あるいは練習させることができるようにしなければならない、とされている（文化庁 1987）。

しかし、アクセントなど分からなくとも、いくらでも話は通じるではないか、という説もある。それでは、アクセントはどんな役割を果たすか、について考えてみよう。

日本語には、同音異類語が多く、その場合、単語でアクセントが異なれば、語の「意義の違い」を区別するのに便利だということが一つある。ツル(鶴)とツル(弦)、カメ(亀)とカメ(甕)、

カキ（牡蠣）とカキ（柿）、ヒニアタル（日）とビニアタル（火）等々、前後関係がなくとも聞き分けることができる。もう一つ、アクセントは、語と語の切れ目を示す働きがある。東京アクセントでは、高く発音される山の部分は、一語のうち一か所に固定されているので、一語のうちに高い山の箇所が二か所以上出て来ることは原則としてありえない（秋永 1965）。日本語アクセントは、高低アクセントであるという特徴は、日本語全体のアクセントの特性としておおむね当てはまるといえる。しかし、個々の語に与えられているアクセントの型や、ある語の仲間について定まっているアクセントの形式といったものは、全国同一というわけではなく地域差もある。例えば、「雨」という語のアクセントの型は、東京では（) であるが、京都では（) となる（天沼他 2003）。

磯村（2000）は、日本語の音声面における、アクセントの重要な役割について、次のように述べている。

・日本語のアクセントは（前提として）、意味を区別する／決まっている／位置を予測できないので、語ごとに覚える必要がある。

・日本語アクセントは、韻律全体にかかわるので、アクセントが分からなければ、イントネーションも正しく実現できない、としている。（磯村 2000）

以上、音声面における、日本語アクセントの重要な役割について、アクセントの機能と特徴の面から考察した。日本語アクセント教育がなぜ重要か、ということについての説明において、日本語の音声面における、アクセントの役割についての説明も大事である。しかし、一方で、アクセント教育が、日本語音声教育の中で、どのように位置づけられているのか、ということ

についての議論も必要である。つまり、「何を」教えるかのシラバスの決定とともに重要なのは、「いつ」教えるかの音声教育の時期および「どう」教えるかの教授法や教室活動の基本方針の決定である（松崎 2001）。この問題については、第4章で詳しく扱う。

以上の前提に基づき、本章の構成は、以下の流れになっている。

2.1 節では、日本語アクセント教育の頻度（いつ教えるか）と導入時期および時間配分などについて述べる。2.2 節では、海外および日本国内におけるアクセント教育の現状と問題点について考察する。

2.1 日本語アクセント教育の頻度（いつ教えるか）と時間配分などについて

「何を」教えるかのシラバスや、「どう」教えるかの教授法や教室活動の決定とともに重要なのは、「いつ」教えるかである（松崎 2000）。そこで、アクセントをいつ教えるかに関わる問題として、①アクセントの導入時期と導入方法、②アクセント教育の頻度、③アクセント聞き取りのためのストラテジーなどについて述べる。

2.1.1 アクセントの導入時期と導入方法

日本語アクセントは、韻律全体にかかわるので、学習の最も初期の段階から導入すべきである（磯村 2000）。

王・大島他（1999）は、音声教育の問題点の中で発音は諸器官の総合的な筋肉運動であり、一度悪い習慣がつくとなかなか直らないことは経験上知るところである。従って、音声教育は、

初期の段階から音声シラバスを定め、それに基づいて導入・練習を順次行っていくことが重要である、と述べている（王・大島他 1999 p.78）。

一方、アクセントの導入方法について、鹿島（2003）は以下のように述べている。

アクセントはやはり絵を示しながら、「雨」と「飴」の違い、「めがね」と「たまご」と「さかな」の違いなどを説明し、意味の違いだけでなく、自然な日本語の音調にとっても大事な特徴であることを述べ、導入とする。この後は、アクセントがそれぞれの語について決まっている現象であるので、それぞれの語で練習するしかないのであるが、アクセント型（ただ、型の名称までは必要ではなく、パターンが呑み込めれば十分）ごとに練習することはできそうである。ただし、リズム型を認めていない場合には、長さのコントロールの点でよりどころが少なくなる可能性がある（鹿島 2003 p.157）。

2.1.2 アクセント教育の頻度（どの程度教えるか）

音声教育の頻度については、経験的に、毎日指導したほうが良いと言われている。発音担当教師が 50 分授業を週に一回行うより、5 日×10 分ずつに分散して毎日行ったほうが良い。集中的に短時間の指導をすることで活動内容が教師・学習者ともに明確になるし、短めに終われば「もっと勉強したい」と興味を引くかもしれない。例えば毎朝最初の 10 分～20 分を発音にあてれば、発音練習が手がかりとなって、授業へのウォーミングアップになる（松崎 2001 p.229）。

以上、アクセントの導入時期と導入方法およびアクセント教育の頻度について述べた。しかし、アクセントの聞き取りが正確にできていなければ、産出も困難なはずで、アクセント産出